

韓国語の名詞化辞「ki」から文末名詞化構文 「ki-ita」への機能拡張の可能性

呉 守鎮

キーワード：韓国語 名詞化辞 文末名詞化構文 「ki-ita」 「原因・理由」

1. はじめに

現代韓国語における名詞化辞は、大きく日本語の「もの」「こと」に相当する形式名詞「kes (것)」と述語の語幹に結合する「m/um (로/음)」「ki (기)」という3つに分けられ、それらは文中あるいは文末に生起する。

本研究では韓国語の「kes」「um」「ki」という3つの名詞化辞のうち、「ki」にコピュラ「ita (이다)」と組み合わせさせた「ki-ita (기이다)」に焦点をあて、考察を行う。具体的には言語類型論の観点から、特に東アジア言語で生産的に見られる名詞化辞から主観的態度を示す拡張現象 (Yap and Matthews 2008) を参照し、韓国語の「ki-ita」が体现している機能や特徴を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 韓国語における名詞化辞の機能拡張

従来、韓国語研究において文中に置かれる名詞化辞の「kes」「um」「ki」は、補文標識 (complementizer) としての機能に関する研究に焦点が当てられてきた (임흥빈 1998, 이광호 2001, 李翊燮他 2004)。補文標識として用いられる「kes」「um」「ki」を例示すると以下のものである。

(1) 비가 오는 것을 알았다.

Pi-ka	o-nun	<u>kes</u> -ul	al-ass-ta.
雨-が	来る-現在連体形	KES-を	知る-過去-終結語尾

「雨が降ることを知った。」

(2) 비가 올 것을 바란다.

Pi-ka	o-l	<u>kes</u> -ul	pala-n-ta.
雨-が	来る-未来連体形	KES-を	願う-現在-終結語尾

「雨が降ることを願っている。」

- (3) 비가 우을 알았다.

Pi-ka o-m-ul al-ass-ta.

雨-が 来る-UM-を 知る-過去-終結語尾

「雨が降ることを知った。」

- (4) 비가 오기를 바란다.

Pi-ka o-ki-lul pala-n-ta.

雨-が 来る-KI-を 願う-現在-終結語尾

「雨が降ることを願っている。」

(堀江・パルデシ 2009 : 102; ハングルは筆者によるもの, グロスは微修正)

(1) (2) に示される「kes」はそれぞれ「現実」と「非現実」、(3) の「um」は「現実」、(4) の「ki」は「非現実」を表象するなど、韓国語の補文標識は日本語には存在しない「現実」や「非現実」のような捉え方が特徴として挙げられよう。

以上のように、韓国語の「kes」「um」「ki」が補文標識としての機能の相違に関して注目されてきたのは確かである。しかし、「現実」と「非現実」とで対立する「um」「ki」とは異なり、「現実」と「非現実」の間で対立を見せず、両方を表象する韓国語の最も代表的な名詞化辞の「kes」は日本語の代表的な名詞化辞「の」とともに、文末に生起して話し手の主観的態度を表す機能を発達させていることが報告されている (Horie 2008, 2011)。

また、文末にコンピュータ無しで生起する韓国語の「kes」「um」「ki」の機能上の分析もなされてきている (金 2005, Rhee 2008, 2011)。特に Rhee (2011) では韓国語の名詞化辞「kes」「um」「ki」がコンピュータを伴わず文末に単独で生起し、主観的態度を表す用法について述べている。まず以下の例を見られたい。

- (5) 우회전 하지 말 것.

Wuhoycen ha-ci ma-l kes.

右折 する-禁止-未来連体形 KES

「右折をしないこと。」

- (6) 진입하지 못 할.

Cinipha-ci mos ha-m.

進入する-否定 不可能 する-UM

「進入することができない (通行止め)。」

- (7) 쓰레기 안 버리기.

Ssuleyki an peli-ki.
 ごみ 否定 捨てる-KI
 「ごみを捨てない。」

(Rhee 2011 : 399-401; 原文はローマ字, 訳とグロスは筆者)

Rhee (2011) では「禁止 (prohibition)」「警告 (warning)」「指示 (directive)」など、発話内の力 (illocutionary force) の程度の度合いの観点から「kes」「um」「ki」の使い分けを示している。(5) の「kes」は当該の事柄に対して相手に働きかける力がより強いのにに対して、(7) の「ki」は相手に働きかける力がより弱く、そして両者の間に位置づけられるのが (6) の「um」であるとされている。つまり、通常文中に現れる名詞化辞「kes」「um」「ki」が文末に生起し、主観的態度を表すということは、名詞化辞の機能拡張の表れとして見なすことができよう。

また、Kim (1984) では名詞化辞の「kes」「um」「ki」が分裂文 (cleft formation) におけるコピュラとの結合可能性の可否が議論されている。

(8) 내가 모른 것은 존이 천재인 것이다.

Nay-ka molu-n kes-un John-i chencayi-n kes-ita.
 私が 知らない過去連体形 ことは ジョンが 天才だ現在連体形 KES-ITA
 「私が知らなかったことはジョンが天才であることだ。」

(9)* 내가 바라는 것은 존이 집에 가기이다.

Nay-ka pala-nun kes-un John-i cip-ey ka-ki-ita.
 私が 望む現在連体形 ことは ジョンが 家に 帰る-KI-ITA
 「私が望んでいることはジョンが家に帰ることだ。」

(10)* 수사관이 입증한 것은 존이 범죄자임이다.

Swusakwan-i ipcungha-n kes-un John-i pemcoyci-m-ita.
 捜査官が 立証する過去連体形 のは ジョンが 犯罪者だ-UM-ITA
 「捜査官が立証したのはジョンが犯罪者であることだ。」

(Kim 1984 : 11-12; 原文はローマ字, 訳とグロスは筆者)

このように、韓国語の名詞化辞の「kes」「um」「ki」のうち、コピュラを伴う「kes-ita」は (8) のように分裂文として用いられるのはもちろんのこと、すでに定着した文末形式として数多くの研究がある (野間 1990, 신선경 1993, 홍사만 2006 など)。一方、これまでは名詞化辞「um」と「ki」の場合、特にコピュラを伴う「um-ita」「ki-ita」は不完全なものと思われてきたが (Kim 1984,

堀江・バルデシ 2009, 塚本 2012)、実際インターネットのブログではよく観察されているため、これまでの「um-ita」「ki-ita」の記述に対して修正を加える必要があると考えられる。

2.2 本研究の立場

本節では、韓国語の文末名詞化構文として、「ki-ita」がどのように位置づけられるかについて述べる。まず、近年韓国のインターネット、特にブログにおいて、以下に示す (11) のようなコピュラ付きの「ki-ita」が頻繁に観察されている。

(11)¹ 고속도로 주행에서 가장 편안한 운전은 앞차따라가기이다.

Kosoktolo	cwuhayng-eyse	kacang	phyenanha-n	wuncen-un
高速道路	走行で	一番	楽だ・現在連体形	運転は
aphcha	ttalaka-ki-ita.			
前車	ついて行く-KI-ITA			

「高速道路走行で一番楽な運転は前の車について行くことだ。」

(11) では「「高速道路走行で一番楽な運転」は「前の車について行くこと」+だ」のような、措定文で表され、動詞「kata (가다, 行く)」の語幹に名詞化辞「ki」とコピュラ「ita」が結合した「ki-ita」で文を終結している。

通常は動詞述語文で示すことができるにも関わらず、あえて述語の語幹に「ki-ita」が付加された文末名詞化構文で終結することは、表面的に名詞述語文の形態をとっているが、「動詞文と名詞文が「接ぎ木」されたかのような、特殊な形の構文になっている (田中 2012: 20)」と言える。

本研究では東アジア言語で生産的に見られる名詞化辞から主観的態度を示す機能への拡張 (Yap and Matthews 2008) を踏まえながら、既存の韓国語の文法体系では非規範的なものとされてきた「ki-ita」を、新たな機能を有する1つの構文として捉えている。これは日本語の名詞化辞の「の」「こと」「もの」「ところ」から文末名詞化構文の「のだ」「ことだ」「ものだ」「ところだ」へ拡張し、形態的連続性が見られる (堀江・バルデシ 2009) 現象と類似していると言える。つまり、韓国語の名詞化辞「ki」から文末名詞化構文としての「ki-ita」への機能拡張は日本語と同様に、形態的連続性の可能性を示唆するものと考えられる。

3. 韓国語の「ki-ita」に関する分析

文末に生起する「ki-ita」は大きく 2 つのパターンが見られる。具体的には、表面的には「ki-ita」の形態をとるが、「ki」と「ita」に分割可能な場合と、「ki-ita」が一語化した場合とがある。以下、文末に生起する「ki-ita」に対して分割可能な場合、一語化した場合の順に見ていく。

3.1 分割可能な「ki-ita」の機能

まず (12) (13) に示すように、「ki-ita」が「ki」と「ita」とに分割可能な場合の具体例を見てみる。

(12)= (11) 고속도로 주행에서 가장 편한한 운전은 앞차따라가기이다.

Kosoktolo cwuhayng-eyse kacang phyenanha-n wuncen-un

高速道路 走行で 一番 楽だ-現在連体形 運転は

aphcha ttalaka-ki-ita.

前车 ついて行く-KI-ITA

「高速道路走行で一番楽な運転は前の車について行くことだ。」

(13)² <올마> 관리의 키포인트는 햇빛과 통풍 그리고 물주기이다.

<Yulma> kwanli-uy khiphointhu-nun hayspich-kwa thongphwung

<ゴールドクレスト> 管理の キーポイント-は 日差しと 風通し

kuliko mwul cwu-ki-ita.

そして 水 やる-KI-ITA

「<ゴールドクレスト>管理のキーポイントは日差しと風通し、そして水をやることだ。」

(12) では「高速道路走行で一番楽な運転」、(13) では「<ゴールドクレスト>管理のキーポイント」といえば、それぞれ「前の車について行くこと」「日差しと風通し、そして水をやること」が挙げられるといった、措定文「A は B だ」の構造をなしている。

また、以下の (14) (15) は「A が B だ」の構造をなしており、「ki-ita」が「ki」と「ita」に分割できる (12) (13) と同様の統語的構造をしている。

(14)³ 상하이에서 못하는 문화생활 중 하나가 극장가기이다.

Sanghai-eyse mosha-nun mwunhwasaynghwal cwung hana-ka

上海で できない-現在連体形 文化生活 中 1つが

kukcang ka-ki-ita.

映画館 行く-KI-ITA

「上海でできない文化生活の1つが映画館に行くことだ。」

(15)⁴ (유기동물) 보호소 가는 길의 차선책이 강서구 15번 버스타기이다.

(Yukitongmwul) pohoso ka-nun kil-uy chasenchayk-i

(遺棄動物) 保護所 行く-現在連体形 道の 次善策が

kangsekwu 15pen pesu tha-ki-ita.

江西区 15番 バス 乗る-KI-ITA

「(遺棄動物) 保護所に行く道の次善策は江西区 15 番バスに乗ることだ。」

(14) (15) では「上海でできない文化生活の1つ」「(遺棄動物) 保護所に行く道の次善策」として「映画館に行くこと」「江西区 15 番バスに乗ること」を挙げている。

(12)～(15) から分かるように、分割可能な「ki-ita」は述語の語幹に結合する統語的特徴を持つ。また、意味的観点からすると、文中に現れる名詞化辞の「ki」は、「現実」を表す「um」とは異なって、「非現実」を表すマーカであるが、文末に「ki-ita」という形態で生起する場合は、「非現実」を表象する意味は無くなり、ニュートラルに名詞化辞としての役割のみが残存する⁵。そのため、「ki-ita」は「現実」「非現実」という両者をコード化する名詞化辞の「kes」に置き換えることが可能である。また、金(2005)も言及しているように、文末に名詞化辞の「ki」が用いられる場合、通常助詞が省かれる統語的特徴を有するため、逆に名詞化辞の「ki」を「kes」に言い換えるには、助詞を付け加える必要がある。

以上、「ki-ita」は主題や主語などを明示する場合は殆どであり、その主体は、文末の「ki」に導かれる名詞句とイコールまたはその一部として捉えられる「 $A \in B$ 」のような構造を持つ。つまり、表面的にはコンピュータを伴う「ki-ita」の形態をとっているが、「ki」と「ita」に分割可能であり、述語の語幹に接続して名詞のような振る舞いをするなど、名詞述語文の構造をしていることが分かった。分割可能な「ki-ita」の構造を示すと図1の通りである。

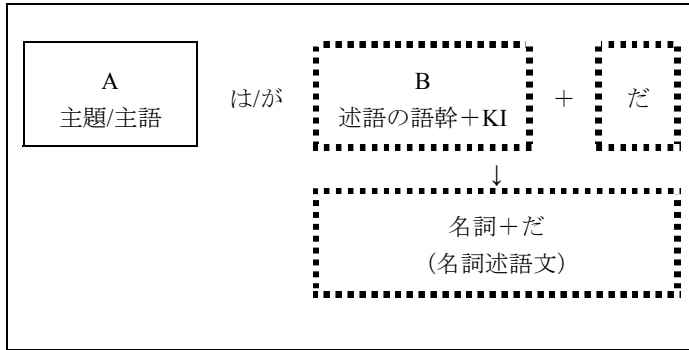


図1 分割可能な「ki-ita」の構造

このように、分割可能な「ki-ita」の「ki」は「非現実」を表象するというより、述語の語幹に結合し、名詞として振る舞っていることとなる。しかし、以下のように分割可能な「ki-ita」のうち、「目標」「宿題」のような「非現実」と関連性を持つ名詞が明示されると、多少「非現実」をコード化しているように読み取れるのも事実である。

(16)⁶ 이차 목표는 카메라사기이다.

Icha mokphyo-nun khameyla sa-ki-ita.

2次 目標は カメラ 買う-KI-ITA

「2次目標はカメラを買うことだ。」

(17)⁷ 오늘의 숙제는 집에 가서 부모님 심부름하고, 안마해 드리기이다.

Onul-uy swukcey-nun cip-ey kase pwumo-nim simpwulum hako,

今日の 宿題は 家に行って 親様 お使い して

anma hay tuli-ki-ita.

マッサージ して 差し上げる-KI-ITA

「今日の宿題は家に帰って親のお使いをし、マッサージをして差し上げることだ。」

(12)~(15)の「ki-ita」に比べ、(16)(17)の「ki-ita」は「非現実」が含意されているのは確かであるが、いずれにしても「ki」と「ita」に分割可能である「名詞述語文」であることは間違いない。

3.2 一語化した「ki-ita」の機能

「ki-ita」は「ki」と「ita」に分割できず、一語化した例がしばしば見られる。分割可能な「ki-ita」は述語の語幹にのみ後接する特徴が見られたが、一語化した「ki-ita」は述語の語幹のみならず、過去の先語末語尾⁸に後接することができる。まず語幹に「ki-ita」が後接する例を以下に提示する。

- (18)⁹ 첫인상은 대단히 중요하다. 사람에게 대한 호감도, 그 절반이
첫인상에서 좌우되는 경우가 많기이다. 그런데 언젠가부터 첫인상으로
 사람을 판단하기 어려워졌다.

Chesinsang-un taytanhi cwungyohata. salam-ey tayha-n hokam-to
 初印象は とても 重要だ 人に対する-現在連体形 好感-も
 ku celpan-i chesinsang-eyse cwawutoy-nun kyengwu-ka manh-ki-ita.
 その 半分-が 初印象-から 左右される-現在連体形 場合-が 多い-KI-ITA
 kulentey enceynka-pwuthey chesinsang-ulo salam-ul phantanha-ki
 ところで いつか-から 初印象-で 人-を 判断する-名詞化辞
 elyewecye-ss-ta.

難しくなる-過去-終結語尾

「第一印象はとても重要である。人に対する好感も、その半分は第一印象
に左右される場合が多いからである。ところでいつからか第一印象で人
 を判断するのが難しくなってきた。」

(12)~(17)の分割可能な「ki-ita」と同様に、(18)では文末に「ki-ita」が生起している点では共通しているが、必ずしも「Aは/がBだ(「A∈Bだ」)」のような構造をとっていない。これは(12)~(17)とは異なる機能を持つ可能性の表れでもあるため、両者においてどのような相違が見られるのかについて、特に先行文に注目する。

(18)の「人に対する好感も、その半分は第一印象に左右される場合が多い」といった「ki-ita」に導かれる事柄は、「第一印象はとても重要である」という事柄に対する「原因・理由」を表している。

次に(19)のように、「ki-ita」は過去のマーカーに後接する場合もあり、同じく「原因・理由」を表すことができる。

- (19)¹⁰ 재료가 달랑 우리식구 먹을 한판 분량 밖에 없는 것을 모르는 우리
 아들이... 피자 먹는다고 자랑하고 초대해도 되냐고 물어보는데, 안돼!
 라고 말할 수 없어서 오라고 했다. 그리고 난 그 후부터 너무 바빴다.

만족해서 발효시키는 동안 재료상에 피자치즈를 사러 가야 했기이다.

Caylyo-ka tallang wuli sikkwu mek-ul hanphan pwunlyang

材料が もっぱら うち 家族 食べる-現在連体形 ワンホール 分量

pakkey eps-nun kes-ul molu-nun wuli atul-i... phica

しか ない-現在連体形 こと-を 知らない-現在連体形 うち 息子が 피자

mek-nun-ta-ko calang hako chotay hayto toynya-ko mwulepo-nuntey,

食べる-現在-終結語尾-と 自慢 して 招待 しても いいかと 聞かれるのに

antway! lako malha-l swu epsese o-lako hay-ss-ta. kuliko nan

だめ と 言う-未来連体形 こと なくて 来いと 言う-過去-終結語尾 そして 私は

ku hwu-puthe nemwu pappa-ss-ta. pancwukhayse palhyosikhi-nun

その 後-から かなり 忙しい-過去-終結語尾 こねて 発酵させる-現在連体形

tongan caylyosang-ey phicachicu-lul sale ka-ya hay-ss-ki-ita.

間 材料店-へ 피자치즈-を 買いに 行く-なければならぬ-過去-KI-ITA

「材料がもっぱらうちの家族が食べるワンホールの量しかないことを知らないうちの息子がピザを食べると自慢をして、招待してもいいかと聞かれるので、だめ!と言えなくて、来いと言った。そして私はその後からかなり忙しかった。こねて発酵させる間店へピザチーズを買いに行かなければならなかったからである。」

(19) では「私はその後からかなり忙しかった」という先行文が存在し、その先行文に対する「原因・理由」として後行文が現れている。後行文としては「こねて発酵させる間店へピザチーズを買いに行かなければならなかった」が提示され、「ki-ita」の付加によって「原因・理由」を表すこととなる。「ki」そのものは述語の語幹に結合する名詞化辞の1つであるが、なぜコピュラ「ita」が組み合わされた「ki-ita」が「原因・理由」を表しているのであろうか。

本来名詞化辞「ki」は「非現実」を表象するため、過去のマーカと共起しにくい統語的制約があるが、「ki」が「非現実」を表象しない例として、「原因・理由」を表す「ki ttaymwun-ita (기 때문이다, する/したからだ)」と、「本質・傾向」を表す「ki maryen-ita (기 마련이다, するものだ/のだ)」が挙げられる(李翊燮他 2004, 이익섭 2006)。そのうち、「ki ttaymwun (기 때문)」は、以下に示すように過去のマーカと共起することができる。

(20) 날씨가 좋았기 때문에 모든 일이 순조로웠다.

Nalssi-ka coh-ass-ki ttaymwuney motun il-i swuncolowe-ss-ta.

天気が よい-過去-名詞化辞 から すべて ことが 順調だ-過去-終結語尾

「天氣がよかったからすべてのことが順調であった。」

(21) 그것은 다 날씨가 좋았기 때문이다.

Kukes-un ta nalssi-ka coh-ass-ki ttaymwun-ita.

それは すべて 天氣が よい過去名詞化辞 からだ

「それはすべて天氣がよかったからだ。」

(이익섭 2006: 350; 原文はハングル, 訳とグロスは筆者)

(20) は名詞化辞「ki」に形式名詞「ttaymwun」と助詞「ey (에)」が組み合わされた「ki ttaymwuney (기 때문에)」が文中に現れており、(21) は名詞化辞「ki」に「ttaymwun」とコピュラ「ita」が組み合わされた「ki ttaymwun-ita (기 때문이다)」が文末に現れている。これらは生起する位置は異なるものの、過去を示す「ass (았)」と共起していると共に「原因・理由」を表している点で共通している。また、これらは過去のマーカ―と共起することによって当該の事柄に対して「原因・理由」を表すなど、「現実」として捉えているため、本来「非現実」を表象する「ki」に反する例外的な表現として位置づけられる。

(18)~(19) の「ki-ita」を「ki ttaymwun-ita」に復元すると、以下ようになる。

(18')(前略) manh-ki ttaymwun-ita (많기 때문이다, 多いからだ).

(19')(前略) sale ka-ya hay-ss-ki ttaymwun-ita (사러 가야 했기 때문이다, 買いに行かなければならなかったからだ).

以上の (18')~(19') のように、「原因・理由」を表す「ki-ita」はすでに定着した「原因・理由」の「ki ttaymwun-ita」に復元できるのは確かであるが、必ずしも「ki ttaymwun-ita」が「ki-ita」に縮約できるわけではない。これは今後詳しい調査をする必要がある。

本研究では一語化した「ki-ita」に対し、1つの可能性として「ki ttaymwun-ita」という文末名詞化構文から、形式名詞「ttaymwun」が省略されたものと考えている。逆に言うと、「原因・理由」を表す一語化した「ki-ita」は「ki ttaymwun-ita」に復元することができるということである。

韓国語では、形態的縮約現象が顕著に見られる特徴があり、名詞レベルはもとより、文末形式においてもよく観察される。例えば「ta-ko ha-n-ta (다고 한다)」と「ta-ko-hay (다고 해)」は「伝聞」を表す形式であり、前者は「[ta-ko ha-n-ta (다고 한다)] > [ta ha-n-ta (다 한다)] > [ta-n-ta (단다)]」、後者は「[ta-ko-hay (다고 해)] > [tay (대)]」のように、引用表示の「ko (고)」が丸ごと省略され、さらに子音や母音が脱落していることが分かる¹¹⁾。

本研究で着目している文末名詞化構文においても形態的縮約現象が生産的に見られることに注目したい。例えば、韓国語の代表的な文末名詞化構文の「kes-ita (것이다)」を「hayyo (해요) 体」に言い換えると、「説明」「推量」を表す「kes-ita」は「kes-i-ey-yo (것이에요)」>「ke-yey-yo (거예요)」, 1人称に限って「kes-ita」が「意志」を表明する場合は、未来連体形のみ前接し、「kes-i-ey-yo (것이에요)」>「key-yo (게요)」のような形態で縮まって定着しているなど、子音や母音が省略されることは決して稀でない。

このように、韓国語の文末形式(文末名詞化構文)では、あるマーカ―が丸ごと省略されたり、子音や母音が省略されたりするような形態的縮約現象はよく観察されている。そして、本研究で取り上げている一語化した「ki-ita」は、元々「原因・理由」を表す「ki ttaymwun-ita」という文末名詞化構文から形式名詞「ttaymwun」の省略の可能性が窺える。以下、(18)(19)を簡単にまとめると、図2のようになる。

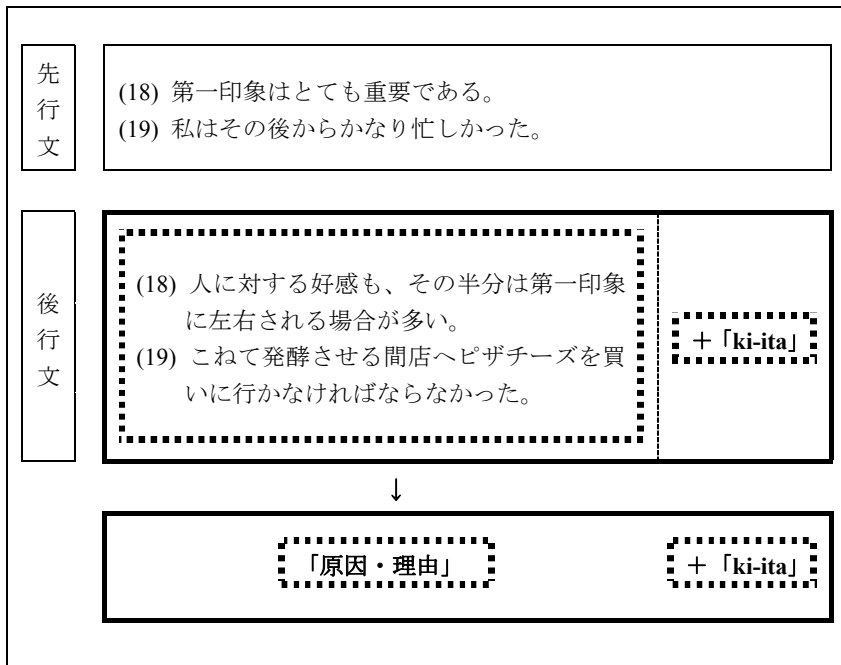


図2 一語化した「ki-ita」の機能

つまり、「ki-ita」に導かれる後行文は先行文に対する「原因・理由」を示し、

それは本来「原因・理由」を表す「ki ttaymwun-ita」から「ttaymwun」が省略したものと考えられる。次節では分割可能な「ki-ita」と一語化した「ki-ita」の間に位置づけられる過去のマーカーと共起するコピュラ無しの「ki」について述べる。

3.3 過去のマーカーと共起するコピュラ無しの「ki」の機能

前節で見てきたように、分割可能な「ki-ita」の「ki」は名詞化辞としての機能を果たしているのに対して、一語化した「ki-ita」は「ki」とコピュラ「ita」との組み合わせがひとまとまりの形式となっており、「原因・理由」を表していることが分かった。ここでは分割可能な「ki-ita」又は一語化した「ki-ita」のいずれかに属しているとは言い難く、過去のマーカー「(a/e)ss, (아/어)ㅁ」と共起するコピュラ無しの「ki」について述べる。

一般的に文中に生起する名詞化辞「ki」は「非現実」を表すという、「現実」を表す「um」とは意味上の対立を見せ、それは文末に単独で現れる以下の例においても同様のことが言える。(22)は「まだ実現されていない出来事」、(23)は「現在または過去の事実」という意味的区別が見られる(金・堀江 2006)としている。

(22) 영어 (를) 공부하ㄱ].

Yenge (?lul) konhpwuha-ki.

英語-を 勉強する-KI

「英語を勉強すること。」

(23) 영어를 { 공부합 / 공부했 }.

Yenge-lul { konhpwuha-m / konhpwuhay-ss-um }.

英語-を 勉強する-UM / 勉強する-過去-UM

「英語を勉強する / した。」

(金・堀江 2006 : 151)

このように、文末に生起するコピュラ無しの「ki」と「um」はメモ、日記などの簡条書きの記録に多用されており、近年はインターネットでの書き込み、広告文、チャットなどで頻繁に用いられるという。

また、金(2005)でもすでに指摘があったように、「現実」を示す名詞化辞「um」は「現在または過去の事実」だけでなく、「まだ実現されていない出来事」に対して用いられる傾向があるとしている。

つまり、「um」は述語の語幹や、過去のマーカーと共起することができ、文末に生起すると「現在または過去の事実」および「まだ実現されていない出来

事」を表すことができるのに対して、文末に生起する「ki」は「まだ実現されていない出来事」を表すということである。そのため、「ki」は過去のマーカーと共起することができないという制約がある（金・堀江 2006）とされている。

しかしながら、近年インターネットのブログでは「um」と「ki」に対する「現実」対「非現実」の対立が希薄化する傾向が観察されている。

(24)¹² <慶州のブルー園リゾートの客室から見つめた外の風景を描写>

단풍은 절정인 모습이었어요. 울긋불긋 예뻐기*.*

Tanphwung-un celceng-in mosupi-ess-eyo. wulkuspwulkus veypppe-ss-ki*.*

紅葉は 絶頂の 姿だ.過去-終結語尾 色とりどり きれいだ.過去-KI

「紅葉は絶頂の姿でした。色とりどりできれいだった。」

(25)¹³ 어제는 동생들이 매장에 놀러 왔어요. 어머머머...음주...우짜...저도

은근 2 캔이나 마셨기!!ㅋㅋㅋㅋ

Ecey-nun tongsayng-tul-i maycang-ey nolle wa-ss-eyo. emeeme...

昨日は 後輩たちが 売場に 遊びに 来る.過去-終結語尾 あらあら

umcwu...ucca... ce-to unkun 2khayn-ina masye-ss-ki!!ㅋㅋㅋㅋ

飲酒 どうしよう 私も 懇懇 2缶も 飲む.過去-KI

「昨日は後輩たちが売場に遊びにきました。あらあら...飲酒...どうしよう...私もひそかに2缶も飲んだ。」

名詞化辞「ki」の場合、例外はあるものの、本来「非現実」を表象するため、文末に生起するコピュラ無しの「ki」においても「まだ実現されていない出来事」を表すとされている（堀江・バルデシ 2009）。しかし、コピュラ無しの「ki」は以上の (24) (25) のような場合、なぜ過去のマーカーと共起し、「現実」を表象しているのであろうか。

前節で述べたように、(20) (21) では名詞化辞「ki」が過去を表すマーカーと共起して「原因・理由」のような「現実」を表しているのと同様に、文末に生起する (24) (25) の「ki」の場合も、過去を表すマーカーと共起して「過去に起こった出来事」に対して「現実」として捉えていることが分かる。通常過去のマーカーが共起する「ki」は「ki ttaymwuney (기 때문에)」あるいは「ki ttaymwun-ita (기 때문이다)」のような、「原因・理由」を表す場合に限られている（이익섭 2006）。しかし、文末で過去のマーカーと共起するコピュラ無しの「ki」は「原因・理由」を表しているわけではなく、ただ「現実」をコード化するなど、過去のマーカーと「ki」の組み合わせが文中から文末までその共起可能な位置が拡張したと考えられる。

過去のマーカ―と共起して単独で現れるコピュラ無しの「ki」は、表面的には分割可能な「ki-ita」からコピュラが脱落した名詞述語文の一種とも解釈できる。しかし、前述したように、分割可能な「ki-ita」は「A はが B だ」のような統語的構造をとっており、主体 A が文末の「ki」に導かれる名詞句とイコールまたはその一部として捉える「 $A \in B$ 」の構造をなしているのに対して、過去のマーカ―と共起するコピュラ無しの「ki」は分割可能な「ki-ita」のような統語的構造を持っていない。過去のマーカ―と共起するコピュラ無しの「ki」は、ただ当該の事柄を「現実」としてコード化しており、名詞化辞「ki」で締めくくことによって、形態・統語上文末名詞化構文として働いているだけである。

韓国語の名詞化辞として「15、16 世紀では「um」が幅広く使われたのに対して、「ki」は一部の限られた用法としてしか使われなかった。また、17 世紀では「ki」の使用が拡大して「um」と「ki」が混在して用いられていたが、18 世紀になってからは「um」の使用頻度が中世の半分にも及ばない反面、「ki」が現在のように、頻繁に用いられたという。その傾向が現代韓国語の名詞化辞では、「um」は衰退し続けている一方、「ki」とともに「kes」が生産的に使われつつあり、「um」が文語体、「ki」と「kes」は口語体としてよく使われている(이익섭・임홍빈 1994)」とある。

つまり、既存の研究では名詞化辞「um」と「ki」は「現実」対「非現実」といった捉え方をしており、両者における対立性に注目してきたが、本研究では文末に出現する「um」と「ki」を通して、「現実」対「非現実」のような、意味的区別の希薄化もしくは非対立性が示唆された。これは現代韓国語では「um」は使われなくなりつつある一方、「ki」は生産的に使われつつあるという報告と無関係では無かろう。

4. おわりに

本研究では韓国語の名詞化辞「ki」から文末名詞化構文「ki-ita」への形態・機能上の拡張を主張し、考察を行なった。「ki-ita」は、「ki」と「ita」が分割可能な場合と、一語化した場合とがあり、前者は「ki」が名詞の振る舞いをしているのに対し、後者はひとまとまりの形式として「原因・理由」を表すことが分かった。さらにその間に位置づけられるコピュラ無しの「ki」は、過去のマーカ―と共起して、「現実」として捉えられる出来事を表すことが確認できた。今後は韓国語の名詞化辞から文末名詞化構文への機能拡張の表れとして「um-ita」に焦点を当て、その機能や特徴を解明していきたい。

注

- 1 例文 (12)~(17) の「ki-ita」は「A \in B だ」構造をとっており、その「A」と「B」に関しては波線 (~~~~) で示す。
- 2 <http://blog.daum.net/womanangel/18295692> (2013年3月22日)
- 3 <http://mrsshanghai.blog.me/40161226593> (2013年2月21日)
- 4 <http://blog.naver.com/rusipia89/140118982498> (2013年2月21日)
- 5 韓国語の「talliki (달리기, 走り)」「palkki (밝기, 明るさ)」「khuki (크기, 大きさ)」「swullaycapki (술래잡기, 隠れん坊)」などは、すでに定着した名詞として位置づけられており、これらは「非現実」の意味を表さないニュートラルな名詞化辞の「ki」の例として挙げられる (이익섭 2006)。
- 6 <http://blog.naver.com> (2012年11月16日)
- 7 <http://blog.naver.com> (2012年11月15日)
- 8 これ以後「過去のマーカ―」と表記する。
- 9 <http://blog.ohmynews.com/aidemtub/311700> (2013年12月2日) また、例文 (18) (19) の先行文に関しては波線 (~~~~)、後行文に関しては一重線 (____) で示す。
- 10 <http://blog.daum.net/four-childmom/123> (2013年12月2日)
- 11 Sohn (1999 : 400-407) が詳細である。
- 12 <http://blog.naver.com/wonjung0612/30178882638> (2014年5月16日)
- 13 <http://blog.naver.com/botton3124/10184099129> (2014年5月16日)

参考 (引用) 文献

- Horie, Kaoru. (2008) The grammaticalization of nominalizers in Japanese and Korean. In: María José López-Couso and Elena Seoane (eds.) *Rethinking Grammaticalization*, 169-187. Amsterdam: John Benjamins.
- Horie, Kaoru. (2011) Versatility of nominalizations. In: Foong Ha Yap *et al.* (eds.) *Nominalization in Asian Languages*, 473-496. Amsterdam: John Benjamins.
- Kim, Namkil. (1984) *The Grammar of Korean Complementation*. Univ of Hawaii Center for Korean.
- Rhee, Seongha. (2008) On the rise and fall of Korean nominalizers. In: María José López-Couso and Elena Seoane (eds.) *Rethinking Grammaticalization*, 239-264. Amsterdam: John Benjamins.
- Rhee, Seongha. (2011) Nominalization and stance marking in Korean. In: Foong Ha

- Yap *et al.* (eds.) *Nominalization in Asian Languages*, 393-422. Amsterdam: John Benjamins.
- Sohn, Homin. (1999) *The Korean language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yap, Foongha and Stephen Matthews. (2008) The development of nominalizers in East Asian and Tibeto-Burman languages. In: María José López-Couso and Elena Seoane (eds.) *Rethinking Grammaticalization*, 309-341. Amsterdam: John Benjamins.
- 堀江薫・ブラシャント・パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』 研究社：東京
- 金廷珉 (2005) 「名詞と動詞の連続性に関する認知言語学的研究—動名詞と名詞化構文の日韓語対照を通じて—」 東北大学大学院修士学位論文
- 金廷珉・堀江薫 (2006) 「韓国語における名詞化構文の終結用法—名詞と動詞の連続性の観点から—」 『日本認知言語学会論文集』 6, 150-159.
- 李翊燮・李相億・蔡琬 (前田真彦 訳) (2004) 『韓国語概説』 大修館書店：東京
- 野間秀樹 (1990) 「<할 것이다>の研究—再び現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって—」 『朝鮮学報』 134, 1-64.
- 田中伊式 (2012) 「ニュース報道における「名詞+です」表現について」 『放送研究と調査』 10月号, 16-29.
- 塚本秀樹 (2012) 『形態論・統語論の相互作用』 ひつじ書房：東京
- 홍사만 (2006) 「국어 의존명사 {것} 의 사적 연구」 (「国語依存名詞 {kes} の史的研究」) 『語文論総』 44, 101-144.
- 이광호 (2001) 「명사화소 ‘-기’ 의 의미 기능과 그 기원에 대한 소고」 (「名詞化素 ‘-ki’의 意味機能とその起源に関する小考」) 『国語文法の理解 I』 泰学社：ソウル, 319-344.
- 이익섭 (2006) 『한국어문법』 (『韓国語文法』) ソウル大学校出版部：ソウル
- 이익섭・임홍빈 (1994) 『국어문법론』 (『国語文法論』) 学研社：ソウル
- 임홍빈 (1998) 「명사화의 의미특성에 대하여」 (「名詞化の意味特性について」) 『国語文法の深層 I』 泰学社：ソウル, 529-554.
- 신선경 (1993) 「‘것이다’ 구문에 관하여」 (「‘kes-ita’ 構文について」) 『国語学』 23, 119-158.